

縦横

犬棒カルタの「む」は「無理が通れば道理引っ込む」だが、全くそのとおりだ。ここ数年、無理を通して道理を引っ込めさせているのが、国権の最高責任者たる内閣総理大臣ご一人であるというのだから、有史以来未曾有の災厄と言っていい。しかも、当人が語る牽強附会の説を無批判に紙に書いてこれを報じ、面白おかしくTV「劇場」に映すばかりか、時としてこれに礼賛までするマスメディアがあるのだから、知的貧困は極まったとしか言いようが無い。

憲法前文第二項の「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。・・・」という平和主義についての記述は全部読み飛ばして、これに続く「われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて」という言葉尻をつかまえて、これをつまみ食いし、平然とイラク派兵の根拠に仕立て上げた。恒久の平和を祈念する日本国民とは、かくの如き「白」を「黒」と言いふくめる「三百代言」を指導者に戴いている人々の謂なのである。

また、憲法第二十条「信教の自由」に関する条文の第三項「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。」などは一顧だにしないで、字面の「信教の自由」を根拠にして靖国参拝を繰り返す。適不適を超えて内閣総理大臣というポストに座す者がここに言う「国及びその機関」そのものなのだが、そんなことは微塵も考えない。そこには、無数の故なく殺された無辜の戦争犠牲者への想像力などは微塵も無い。

小泉純一郎氏がここまで無理を通して道理を引っ込める裏には、平和憲法を放棄し、新たに「尊い犠牲者」を調達するためのしたたかな戦術が隠されているのだとしたら、私たちが今すぐ何をすべきかが見えてくる筈だ。